

善照寺
寺報

ぜんしゅうじ

第12号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七) 二二三二
FAX 〇四七(三九七) 二二三二

いよいよ秋も^{たけなわ}酣となりました

善照寺住職 今岡達雄

いよいよ秋もたけなわとなりました。十月には八百万の神は出雲に集まるそうです。ですから日本各地では十月を神無月(かんなづき)と呼び、出雲では神有月(かみありづき)と呼んでいます。行徳では十月に香取神社や稲荷神社のお祭りがあり御輿(みこし)が担がれます。御輿は神様の乗り物ですから神様がいないときに御輿を担いでお祭りをするなんて変な気もしますが、もしかすると神様が早く戻ってくるように宴を開くのかもかもしれません。十一月十七日は善照寺の十夜法要です。今年は水曜日になります。

お時間が御座いましたならば是非ともお寺にお集まり下さい。

さて、今年は大候不順です。夏は猛暑で日照り続きで、その夏が終わったと思ったら、今度は秋雨前線やら台風やら雨ばかりでした。十月だけで半年分の雨が降ったそうです。台風も二十二号、二十三号相次いでやってきました。

ところで、北からの強い風雨があると心配する事、それは本堂の正面と墓地側の窓枠から雨が浸入することです。油断をすると畳が水浸しになってしまいます。ですから台風の際は要注意なのです。

下段右側の写真は二十二号の時の本堂内です。窓側の畳を上げ、窓枠から漏れる雨水受けを作っていました。漏水はバケツいっぱいになりました。正面玄関には目張りをして雨水の浸入を防いでいます。左側の写真は二十三号の時のものです。北の面した窓にブルーシートを張って、雨が吹きつけないように工夫しました。それでも雨が浸入してしまいました。

現在の本堂は大正二年建てられ、昭和五十五年に大改修をしてアルミサッシにしました。古い建物なので木材が變形しておりサッシとの間に隙間ができません。そこでシーリング材で水漏れ防止処理をしています。水漏れが止まりません。何度も修理していますが、いまだに解決されていません。洪水で家が水につかっってしまった方々のことを考えると大したことではないのですが、北からの暴風雨になると憂鬱になります。

(住職)



台風23号では直接風雨に曝されないようにシートを準備しましたが、それでも漏水しました。



台風22号では北からの暴風雨にさらされ窓枠から漏水しました。畳を上げ水受けを作りました。

住職法話

お十夜(じゅうや)の話

お十夜は阿弥陀佛への報恩感謝のための法要です。ここでは阿弥陀佛にどんな恩があるのかをお話しましょう。

二つの悟りの道

お釈迦様は私達に二つの悟りの道をお示しになりました。第一は自らの力で悟りを得る方法です。お釈迦様の弟子たちはお釈迦様から直接に説法を聞き、戒律の沿った正しい生活をし、心の平静すなわち悟りに達することが出来ました。お釈迦様が亡くなった後も、お釈迦様の時代と同じように、家族を捨てて出家し、戒律に沿った正しい生活を営み、お釈迦様の説法を読み理解し、心の平静つまり悟りを得るように努力することが悟りを得る道でした。しかしお釈

迦様の時代から遠ざかる(末法の世)にしたがって悟りを得ることはだんだん困難になりました。

このような状況に対応してお釈迦様はもう一つのお話を残されました。それが阿弥陀様のお力(本願力)による悟り(心の平静)なのです。阿弥陀仏は悟りを得るために四十八の誓願(お誓い)を建て、そのお誓いを成しとげるために修行に励みました。そして、全ての願を達成し遠い昔に阿弥陀佛となりました。この佛となる前の誓願は「本願」と呼ばれ、その「はたらき」は今現在も私たちに降り注いでいます。その十八番目の本願は「一切の人々が、誠の心をもつて信じ願って、私の国である極楽浄土に生まれたいと欲して、わずか十回でも私の名を呼んだならば、必ず極楽浄土に往生することが出来るようにしよう」というものです。極楽浄土に往生できるということは

この世での安心を生み出します。私達は阿弥陀様に救われると信じる事が出来れば何の心配もなくなり、心の平静を実現できるのです。これが第二の悟りの道なのです。

現世において修すべきこと

無量寿経の後段には次のように記されています。

「この五悪に満ちる世間においても、正しい心をおこし、行いをつつしんで生活し、功德の本たる六波羅蜜の行や五善を修する正しい心をもつて、一日一夜の八齋戒をたもつならば、その功德は阿弥陀仏の浄土において百年の間、善根を積んだよりすぐれた功德があり、さらに十日十夜のあいだ善根を積むならば、その功德は他方の仏国において千年の間修した善根よりもすぐれているのである。そして仏の教化をつけた国や村は平和になって、日も月も清く輝き、風雨も時になつて程よく、災

害や疫病はおこらず、国は富み、民は豊かになって、兵器を用いることなく、人びとは徳があがめ、仁を尊んで礼節や謙讓の道を守るようになるのである。」

しかし、誰が正しい心をおこし、行いをつつしんで生活し、六波羅蜜の行や八齋戒をたもつことが出来るでしょうか。

だから十日十夜の善行

法然上人がおっしゃるには、念仏一行に全ての行が含まれます。だから、阿弥陀様への報恩感謝を込めて十日十夜の念仏会を行うのです。(合掌、住職)





耳四郎の改心

法然上人のおことば

「阿弥陀仏を信じて念仏する人には、あらゆる仏・菩薩がご加護をくださり、いろいろの悩みをおこす悪い鬼神を除きはらってくださいます」

(『浄土宗略抄』より)



鎌倉時代の河内の国に、天草の耳四郎という男がいました。盗み癖のはげしい男で、京に出て盗人として生計をたて、悪評にのぼっていました。

ある日、忍び込んだ屋敷の床下にいたとき、床の上では、法然上人を呼んでのお説教が始まるうとしていました。彼は出るにあらなくなり、床下でじっとしておりました。

お説教は、どんな悪業をかさねた人でも、そのままでは地獄に落ちるような人であつても、仏はいつでも見守っている。そ

して、救いの手をさしのべている、という話でした。

耳四郎はいたく感動し、思わず床下からはい出て、上人の前にひれ伏してしまいました。まわりの人は、さぞ驚いたことでしょう。彼は、

「私は幼いころから盗みがやめられず、こんな姿になつた。こんな私でも仏は救ってくださいのか」

とたずねました。「そう、仏の救いのあることを、いつも忘れず思いなさい。」

耳四郎は、自分のような者をいとおしむ仏のあることを忘れまいと、心に誓つたのでした。



しかし、習慣とはおそろしいものです。彼の盗みはおさまるところか、ますます激しくなつていきました。京の町では、か

仏さまからの手紙

の法然上人まで悪く言われる始末でした。仏を信じさえすれば、どんな悪業をしてもよいのか、とんでもない教えである。ある信者は耳四郎が憎くてたまらず、殺してしまうために誘い出しました。

その信者は、耳四郎に酒を飲ませました。そして抵抗できなくなつた耳四郎の目の前で、隠しておいた刀をふりあげました。そのときです。

彼の目にうつつたのは、酔いつぶれた耳四郎ではなく、黄金色にかがやく仏であつたということです。殺そうとしていた彼は、思わず刀を落としました。

我に返つてみれば、それは耳四郎が、南無阿弥陀仏と祈っている姿でした。耳四郎は涙を流し、つぶやいていました。

「お前がおれを憎むのも当然だ。おれが悪かつた。おれは自分の行いが罪だと知つて、それでも救いの手をさしのべてくれる仏に一心に祈っていた。けれ

ども生来身についた悪い癖は、どうにもなおせないのだ。どうしたらよいのだろう。おれは、この仏にたよるしかないのだ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」



彼はけつして、開き直つて盗みが続けているのでは、ありませんでした。自らの性癖をなげきなげき、それでもいつのまにか、忘れて悪行を犯している。おさえようとしても、煩惱はとどめようもなくあふれてくるのです。そして、その罪深さの実感の奥底から、仏に救いをもとめていたのです。

彼は晩年にいたつて、ついに盗みをやめることができました。しかし生計のための盗みでしたから、衣食に窮した耳四郎は、京を去り、ひっそり暮らしたということでした。

(土屋師『人生の真意義』参考)

(副住職)

お寺との付き合い

今回は「お十夜」の供養についてお話ししましょう。

十夜法要浄財袋

寺の年中行事には初念仏、彼岸、お盆、施餓鬼などがありますが、「お十夜」は特別な法要です。なぜ特別かというとこの法要は阿弥陀様への感謝のためだけではなく、秋の収穫祭の意味があるからです。行徳地域は半世紀前まで半農半漁の農村でしたから、秋には色々な農作物の収穫が行われました。一年の労働の成果を喜び、恵みを与えてくれた自然に、御守りいただいた先祖代々の霊に、また仏様に感謝をするために、採れた農作物をお供えして法要を行ったものです。つまり、阿弥陀様への感謝の法要にあわせて自然の恵みに感謝し、そしてお塔婆をあげ先祖や先亡諸霊の供養を行ったのです。

私の記憶によれば昭和四十年代までは、十夜法要の檀信徒の皆様からの本尊へのお供物は「新米」でした。一升入る紙袋が配られ、そこに新米を入れて本尊にお供えしたものです。農業をしていない檀信徒の方はお米の代わりにお金を「十夜法要浄財袋」に入れてお布施としました。この習慣が残っているので、今でもお十夜の時だけ「十夜法要浄財袋」をお配りしているわけです。

十夜法要とは

十夜法要の特徴は行道じゆどうが行われることです。行道は礼賛らいさんという阿弥陀様やその他の仏様を賛美する声明しょうみょうを唱えながら、本尊の周りを右回りに回る作法です。散華さんか（花びらをまきます）はいつも行われますが、行道はお十夜だけです。これは阿弥陀様を讃えるために特別に行われるのです。

法要が終わると寺から皆様方

へのお供物が配られます。めでたい法要ですからお赤飯をお配りすることが多いようです。お茶を飲んでいる間にお塔婆が本堂の周りに並べられますので、お塔婆を探し出しお墓にお建てになって下さい。

お塔婆の申込みとお布施

お塔婆の申込みは遅くとも十月十日までにお願ひします。また、遠方の方には「出欠のがき」を同封してあります。こののがきで出欠・塔婆等についてお知らせ下さい。近隣の方々には「出欠のがき」は入れてありません。塔婆のお申込みはお電話で結構です。「十夜法要浄財袋」を同封しました。お十夜のお布施と塔婆代はこの袋に入れてお持ち下さい。

お塔婆は一基四千円です。これとは別にお十夜供養のためのお布施（ご回向料）を包んで下さい。金額はお気持ち次第ですが平均五千円程度です（住職）

編集後記

浄土宗の「お十夜」は、鎌倉にある浄土宗寺院の大本山のひとつ光明寺の観音祐崇（かんよゆうそう）上人が、一四九五（明応四）年一月に行ったのが始まりとされています。時の天皇、後土御門天皇は戦国時代の戦乱の中で苦しむ民衆の悲惨な生活に心を病み、仏の救いを求めました。名僧の誉れ高い佑崇上人は、戦乱の世を救う方法として「無量寿経（むりょうじゆきょう）」の教えにある「十日十夜、善を積むことによる功德」など浄土の教えを説き十夜法要を行いました。以来五〇〇年、光明寺の十夜法要は毎年十月中旬ごろに盛大に行われていきます。副住職と私も、もう五年ほど前になりましたが、光明寺のお十夜に行ったことがあります。きれいに着飾ったお稚児たちの舞など華やかな法要で、自坊とまた一味違い印象的でした。

（副住職室 久美英）